

有明高専

# 図書館報

No. 14



## 目 次

巻頭言 .....	2
教職員推薦図書 .....	3~4
読書感想文コンクール .....	5~10
図書館統計 .....	11
郷土の文化財・編集後記 .....	12

## 卷頭言

図書館長 岩本 晃代



新館長として就任してからあっという間に一年が過ぎました。前号の図書館報でも紹介され、また、利用者のみなさんが実際に図書館に足を運んでお分かりのように、有明高専の図書館は、1階の美術ギャラリー、そして随所に工夫の凝らされた図書館の書庫、学習に適した閲覧室等々、鮮やかに再生しました。あらためて前館長の焼山先生のご尽力に感じ入っているところです。おぼつかない足取りの新館長ではありましたが、新しい図書館は、おかげさまで利用者にも大変好評です。建物としての図書館に、さらに利用者の「魂」も宿りつつあり、機能面での向上が日々実感されるようになりました。

さて、図書館は、一般に、建物の構造や蔵書数、来館者の利便性等に光が当てられることが多く、それらの重要性はもっともなことなのですが、少し別の視点から図書館をみてみると——実は、名作の舞台としても活躍していることにお気づきでしょうか。

今や世界的な人気作家となった村上春樹の代表作『海辺のカフカ』。この物語は、主人公の「僕」が15歳の誕生日に家を出て、遠くの知らない街の小さな図書館の片隅で暮らすという設定になっています。また、授業で習った人も多いと思いますが、夏目漱石の『こころ』にも図書館での重要な場面があります。「お嬢さん」と共に恋をしてしまった「私」と「K」は、幼い頃からの友人でした。「K」の方から先に「お嬢さん」への切ない恋心を打ち明けられた「私」は、自分の思いを隠し、複雑な心を抱えたまま図書館で調べものをしていました。そこへ「K」が現れるという場面。それから、山田詠美の『晩年の子供』でも、死を予感した少女の純粋で混沌とした心の揺れ動く様が、図書館の場面によって巧みに描き出されています。

このように知の宝庫である図書館は、作家にとっても物語の素材として魅力あるものなのです。再生した有明高専の図書館が、利用者のみなさんの生活、さらには人生における有意義な舞台となることを祈っています。

# 教職員推薦図書

昨年4月以降に新しく着任された先生方にご自分の印象に残った本や、ぜひ学生に読ませたい本を選んで、エピソードなども交えつつ推薦していただきました。ここで紹介する本は、図書館にも揃えていますので、ぜひ手にとってみてください。



- 1.『この国のかたち』司馬遼太郎著
- 2.『日本人の英語』マーク・ピーターセン著

校長 立居場 光生

頁数が少なくてしかも各章ごとに結論あるいは提言が記載されている本を紹介します。学生諸君が読書の楽しさを知るあるいは物事を少し落ち着いて考えるなどのきっかけになれば幸いです。

1. 司馬遼太郎著、この国のかたち 一～六、文藝春秋。この著者には多量な文献の精査に基づく歴史小説が多くあり、どれも読み物として大変面白いのですが、この本ではこれまでの執筆活動を通じ、日本とは？日本人とは？を探求した著者の歴史観が語られています。
2. マーク・ピーターセン著、日本人の英語、岩波新書。私は電子通信工学の研究者として英語による論文を数多く書いてきましたが、この本から英語に対する基礎的な誤解や無知に気づかされ、感謝しています。日本語にも触れておきます。大野晋著、日本語の教室、岩波新書は、日本語を通して日本の文化・文明に言及しています。

最後に、数学や物理学などの自然科学や専門分野の英語版教科書を読むことを奨めます。英語の教科書は日本語本より概して理解し易いように思いますし、英語の勉強にも役立ちます。



### 『困ります、ファインマンさん』

岩波現代文庫

リチャード・P・ファインマン

大貫 昌子 訳

機械工学科 堀田 源治

高専祭前日の文化講演での先輩でもある園田宇宙センター所長の話は忘れ難いが、私にとってもう一つ忘れ難いのは1986年スペースシャトル・チャレンジャー号の爆発事故である。この事故は打ち上げ中継に見入っていた世界中の人々の前で起こった。原因は寒気の中での強行発射で固体ロケット外壁の隙間を埋めるゴム製Oリングが冷温硬化して機密性が低下し、高温

のガスが漏れたためである。事故後の調査委員会ではNASAや関係者の思惑が交錯して議論放逸し、眞の原因追究が危ぶまれた。このような中でノーベル物理学者であるファインマンは、氷水の入ったコップに浸けてチャレンジャー号打上げ時と同じ温度に冷やしたゴムが弾性回復力を失う、という実験を事故調査委員会の席上で行って見せた。席上の誰もが目前で示された事実には従わざるを得ず、議論は急速に収束した。この本では、うやむやになりそうな事件を一人の物理学者が最後に情勢をひっくり返して決着を付ける痛快さも読みどころではあるが、「大きな惨事は誰もが知っている小さな事実を見逃したときに起きる」という博士の言葉はその後の私の座右の銘ともなっている。



### 『ビジネスで成功する髪型の法則』

柳本 哲也 著 エイチエス株式会社

物質工学科 前田 良輔

申し訳ありませんが、ここでご紹介する本は男性向けです。もちろん女性が読んでも将来のために大いに参考になるでしょう。さて、皆さんは髪型に対してどの程度のこだわりをおもちでしょうか。最近、洗面で髪型をセットしなおして教室に向かう男子学生をよくみかけます。その学生はファッションの一部として髪

型に「こだわり」があるのでしょうか。ここで紹介する「ビジネスで成功する髪型」は社会で働く人への髪型のアドバイス本といえます。ですから間もなく就職する5年生や専攻科2年生、そして就職活動に乗り出す4年生や専攻科1年生には参考になるでしょう。著者が言う、「ビジネスで成功する髪型」とはどんな髪型なのでしょうか。これには8つのポイントがあるようです。写真も織り込まれ、たいへん読みやすい本です。そういう私がこの本を読んで少し髪型を変えたことを誰も知らないでしょう。学生から社会人へ・・・、これから皆さんが必要通る道ですので、そのときに髪型にも少し責任を感じてみてはいかがでしょうか。



### 『ホームレス中学生』

田村 裕 著

一般教育科 西山 治利

お笑いコンビ「麒麟」の田村裕さんが中学時代におくった野宿生活を通じ、彼の周りの人たちの思いやりとその人たちへの感謝を著わした本です。ベストセラーになった本で読んだ人も多いでしょうし、読んでい

なくともドラマ化や映画化もされ知っている人も多いと思います。

「人は、一人では生きていけない。人とのご縁を大切にし、周りの方々のおかげで生きていくことができる。そのことに感謝しなくてはいけない。」そのことを再確認できました。

学生時代からあまり読書をしない私が、イッキに読んでしまうほど引き込まれたので、あまり読書が好きでない人も楽しめる一冊ではないでしょうか。

平成20年度

# 校内読書感想文コンクール

## 感想文コンクール講評

図書館長 岩本 晃代

この校内読書感想文コンクールも本年度で20回目となりました。この節目となる記念すべき平成20年度のコンクールには、全校学生中、584名の応募者がありました。厳正な審査を経て、このたび最優秀賞1名、優秀賞2名、佳作5名が決定しました。

優れた読書感想文には、読者の素朴な所感ではなく、そこからさらに踏み込んだ「解釈」が述べられています。例えば、最優秀賞に選ばれた「地獄変」の感想文を読んでみてください。登場人物に対する率直な気持ちを述べながらも、それにとどまらず、登場人物の心理に、自分なりの解釈を試みています。さらに、それをもとに、作家・芥川龍之介の心理にまで言及しています。感想文が苦手な人は、入選した感想文をしっかり読んでみましょう。感想文の書き方の勉強になるはずです。

今回は、2年生、3年生の活躍が目立ちました。対象にした作品もバラエティに富んでいて、審査する側にも力が入りました。1年生の入賞者も出て、全体的にバランスのとれた有意義なコンクールになったと思います。ただ、例年のことですが、上級生の応募が少ない点が課題として残りました。4年生、5年生の健闘を祈ります。

最後になりましたが、この感想文コンクールにご尽力頂いた、クラス担任の先生方、審査をして頂いた委員の先生、図書館スタッフの教職員の方々、国語科の先生に厚くお礼申し上げます。

### 入賞者

■最優秀賞 建築学科 3年 比良松珠実 『地獄変』を読んで

■優秀賞 物質工学科 3年 片山 阿弓 十七歳  
2年1組 前田 彩 人間失格を読んで

■佳作 機械工学科 3年 寺地 一拓 利己主義の中に  
建築学科 3年 柿原 慎治 『蝶の王』を読んで  
2年4組 岡 鮎美 『十七歳』を読んで  
2年5組 福島 和哉 海と毒薬  
建築学科 1年 梶原 萌子 『夏の庭』を読んで

## 入賞作品紹介

### 最優秀賞 『地獄変』を読んで

建築学科3年 比良松 珠実

この話の中で良秀に地獄絵図の屏風を描くように命じた大殿は非凡な人物として描かれていた。大殿の心が語られるのは、語り手である「私」が引用している大殿のセリフと、「私」が描写する大殿の行動や様子を通してだけだった。

『地獄変』を読み終えて、大殿は良秀に嫉妬をしたのではないか、と思った。大殿が良秀の前で娘を焼き殺そうと思った理由はわからないが、大殿はほんとうの地獄を見た者だけが、ほんとうの地獄を描くことができることを知っていたように感じた。語り手の「私」は、娘を焼き殺したのは良秀のまがった性根を懲らしめるためだと推測している。しかし、そうであるならば娘が焼かれる場面での大殿の行動が不可解なものになる。大殿は、良秀が恍惚の表情を浮かべて燃え盛る牛車を眺める姿を見て、野獸のようにあえいだ。大殿は、何かを悔しがっているように思えた。大殿は、牛車の場面で屈強の男を呼んでいた。もし、良秀が騒ぎ始めたり、牛車のほうへ走りだしたりしたら押さえつけるための準備なのだとと思った。しかし良秀は取り乱すことなく牛車を見つめ続けた。完成された屏風が持ち込まれたときの大殿は悔しそうだった。大殿は屏風

が完成することを不満に思っているようだが、どうすれば満足したのだろう、と考えた。もし屏風の創作が行き詰まつたまま完成しなかったら、あるいは燃え盛る牛車を見て良秀が取り乱したら、あるいは完成した屏風が凡庸なものだったら大殿は満足したのではないかと思う。

完成した屏風は「入神の出来映え」とされている。良秀が描き上げた地獄絵図は「神の領域」に属する作品だと定義されているのかもしれない、と思った。大殿は自分自身で作品を思っていたわけではないが、自分以外の人間がその領域に侵入してしまうことが許せなかつたのではないかと思う。良秀のような作品を残すには神の領域へ踏み込まなければならない。しかし、そこへ侵入してしまえば良秀の最期のように命を捨てなければならないかもしれない。

芥川龍之介は神の領域に憧れながらも、命を捨てる事のできない歎痒さを大殿に託したのではないかと思った。そんな人間の唯一の救いは、誰も神の領域に侵入しないことであり、誰も入れなければ自分がそこに行けなくても満足できる。しかし良秀は絵図を描き上げてしまった。

龍之介は大殿と良秀という二人の人物を通して、未だ自分が入ることのできない神の領域を見ていたのではないかと思った。

### 優秀賞 十七歳

物質工学科3年 片山 阿弓

この本は題名の通り筆者が17才の時の作品である。彼女の学校のこと、仲間との関係、家族、そして自分自身の考え方方が真っ直ぐと表現されていた。

本の中に登場する少女・路望は17歳。この本を読んだ私も今現在同じく17歳である。生まれは筆者が10年近く上ではあるが、彼女の考え方方に共感するところが多かったように思う。

例えば、彼女が小学から中学時代に受けたいじめの話である。私と同世代の人で、この文章を読んで何も心当たりの無い人は誰ひとりしていないのではないか。そのくらいじめは身近に存在するという悲しい現実がある。

文中で筆者は、いじめについてその辛い体験と共に彼女なりの気持ちや考えを述べている。一見すると理解の無い大人に対する反感のようにも受け取られそうだが、私はこれを読者に対する切実なメッセージだと考えている。もし今、この本を読んでいる人がいじめの被害者であったとき…その人は未来を明るく生きる

筆者に励まされ、少なからず勇気を与えられるだろう。逆に今いじめの加害者である人ならば…一瞬でも、相手の立場を考えられる人間になるはずだ。そして穏やかな今を過ごしている人がこの本を読んだとき…現在の環境を当たり前と思わず、どうにかして保持しようと努めるだろう。私の場合は幸いにもこの例であった。

このように、筆者は自分の経験とその中で感じ取った思いをそのまま文章にして私達に届ける事で、彼女に全く関係の無い様々な思いを持った人々を救うことが出来るのだ。

このことは筆者が必ずしも意図していることではないだろう。なぜなら文中で彼女はどうみても今時の普通の女子高生で、ただ一生懸命に人生を生きているだけだからだ。この本を読んでいると日記を覗いているような錯覚に陥る。それだけ彼女は飾り気のない言葉で自分の意志を発信している。

この本は、読んだ人の境遇によって様々な捉え方が可能であると思う。しかし17歳の彼女の真っ直ぐなメッセージは、同じ荒波に揉まれながら生活する私達に必ず何かを届けてくれる。その中でも、私は特に自己を持つ大切さをしっかりと受信したつもりだ。

## 優秀賞 | 人間失格を読んで

2年1組 前田 彩

読みながら、私はずっと鉛を飲み込んだような気分だった。

私にも、周りの人たちが何の悩みもなく暮らしているように見えるときがある。また、彼らはどうしてそんなにも自信あり気な発言ができるのか。（私には、それが正しい言動だとはとても思えない時ですら。）彼らの、根拠のないようを感じる自信を不思議に思う時がある。そんな時、私も葉蔵と同じような不安に襲われたりする。

それにしても、なぜ葉蔵は「廃人」扱いされる立場にまでなってしまったのだろう。名家に生まれ、頭も良く、容姿端麗。それだけ揃っていれば、誰もが羨む素晴らしい人生が送れるはずではないか。

葉蔵は、「自分が世のすべての人たちと違っている不安。人間の営みが何も分かっていない不安」から、子供の頃から自分の家族さえ恐ろしく感じていた。肉親たちに何か言われても口応えもせず、一言も本当の事を言わず、絶えず笑顔をつくりながらも内心は必死に道化を演じている。人間に対して、いつも恐怖に震えおののき、人間としての自分にみじんも自信が持てず、ひたすら無邪気の楽天性を装う子供。

なんて悲しいのだろうと思った。安らげるはずの家族の中ですら、本当の自分を出せない、道化の仮面を

被っていなければならぬ葉蔵の心の辛さ、孤独。

私は、葉蔵に「人は、一人ひとり違っていて良いこと。それが当たり前の事。他人の心の中が分かって生活している人なんてやしないし、多くの人が他人の気持ちなんてさほど気にしないで生活していること。」を伝えたくなかった。

故郷を離れ、東京の高等学校に入学した葉蔵は、画塾で堀木という男と知り合う。私は、この男と出会ったことが、葉蔵の人生を転落させる大きなきっかけだったと思う。堀木に酒と煙草と淫売婦と質屋と左翼思想を知らされる。堀木と葉蔵は、この後永い付き合いになるが、それは親友とか友達関係ではなく、堀木が葉蔵を都合よく利用していただけだ。私には、堀木が人間の悪の化身に見え、葉蔵の弱い優しい心に入り込む悪魔に見えた。

葉蔵は、酒におぼれ心中事件を起こし、酒の代わりにすすめられて飲みだした薬（モルヒネ）の中毒、喀血。そして、脳病院に入れられた葉蔵は、自分を「人間、失格。もはや自分は完全に人間ではなくなった。」と思う。

私は、葉蔵が「人間失格」だとは思わない。ただ、人間の生活を営むには、心が繊細で、自分の心に正直過ぎたのではないかと思った。

これは太宰治の自伝ではないが、彼の人生と重なる部分が多いと思う。この作品で人間不信の主人公を書いた彼が、人を信じる事の尊さを『走れメロス』で書いている。彼は本当は人を信じたかったのだと思った。

## 佳作 | 利己主義の中に

機械工学科3年 寺地一拓

心について「人の心は複雑なものだ」と考える人は少なくないと思う。しかし私は、芥川龍之介の小説『鼻』を読むことでそうも思えなくなってきた。というのも小説の中の一言「利己主義」の言葉にひかれたからである。

生活する中で、私たちはその時々で様々な感情を抱きながら過ごしている。特に人と会うとき（対話するとき）、それは一段と複雑なものになるであろう。が、よく見、考えてみると、それらはすべて「自身の心の満足」を得るために動きであるのだと言えるのではないだろうか。

例えば、ある人に会いたいと思うとする。これは会うことが、心に「満足」を与える行動であるからであろう。逆に会いたくないと思うとき、それは会わないことが感情の平安を保ち、心を満足させるからだと考えられる。何かに打ち込むことはその行為によって満足するわけで、逆に、何もしないことは、リラックスすることで満足する。人を哀れむことは、どこかで哀れむ自分の行為に満足し、人をなじることは、された人を傍観すること自体を満足に感じる心をどこかに隠し持っているからなのではないだろうか。要するに人は誰しも「満足」を得るために行動するもので、それ

は同時に、人の心の本質は利己主義であると証明しているように見える。

作中で著者は「誰でも他人の不幸に同情しない者はいない。ところがその人が不幸を、どうにか切り抜けることができると、今度はこっちでなんとなく物足りない心持ちがする。～（中略）～ある敵意をその人に対して抱くようなことになる。」と主張する。認めたくないが、まさにそのような心が奥底に埋もれているように思えてくる。考えれば考えるほど重いものがしかかってくるような気持ちに私はなった。たぶん凶星なのだ。

社会の中での利己主義について考えてみる。集団の中では利己の獲得は難しい、が、大多数が同じものを満足の対象とするとき、それはとても大きな力を持つようになると思う。良い方向に作用すればよいが、悪い方向に作用するもの、その典型はいじめではないだろうか。作中の主人公内供も対象になった一人であったと思える。

結局、人間は何かしらの利益を求めるながら生きている。一人ひとりの願望が合わさったとき、社会集団としての利害にどういった結果が現れるのか、影響が出てくるのか、それは各個人の利己的な考えをいかに理性をもってして修正するかにかかっているように思える。

『鼻』という小説を読み、そのテーマである「利己主義」について考えることは、私にとって有意義なものになったと感じる。

## 佳作 『蠅の王』を読んで

建築学科3年 柿原慎治

「難しい」というのがまず読んだ後の正直な私の感想だった。というのも、その内容が他のこれまで読んできた同じような題材の本と比べてあまりに異質だったからだ。この物語では孤島に不時着した少年達の暮らしを書いており、その点で以前読んだ『十五少年漂流記』とそっくりだが、後者では皆が協力し島で立派な暮らしをしているのに対し、前者は最初こそそうであるものの、次第にそれは醜く崩壊し、人の獸性というものが露骨に表れて二人の少年を殺害し、ついには島を焼きつくしてしまうのだ。

この作品は絶望的なほどに人間の悪い部分を引き出していると思う。そして皮肉なことに、島を焼く煙によって彼らは海軍の巡洋艦に救助される。だがその艦は少年達のこれまで行っていた、あの狂気と殺戮をもっと巨大に、むごたらしくした中へ行こうとしているのである。これほどの皮肉があるだろうか。

この作品の中で理性をもって最後まで行動しようとしていた三人、主人公のラーフと正論を述べても相手にされないピギー、変わり者と思われたサイモンはまさに人間の理性の砦と言うべきものだった。しかし、他の連中が狂気に走り、サイモンを打ち殺した時、後

の二人はどうする事も出来ずに眺めるのみであった。これが限界なのだと作者は言いたかったのだろうか。

そして重要なのが蠅の王というものである。それは作品中では切り落とされた豚の首として描かれ、サイモンに論戦を挑んで来る。これは人間の心の中の獸性、悪といったものの象徴として心の中に語りかけて来るのだ。サイモンは抵抗を試みるが、結局は仲間、いや仲間の心の内の蠅の王そのものによって殺されてしまう。

この本を読む限りでは人間は結局狂気に負けるのかとも思えてきそうだが、僕はそうは思わない。というのも、人間には確かに彼らのような獸性もあるが、理性というものが確かに存在するからだ。この小説ではもし救助が来なかった場合、明らかに理性のある存在は島から消えていた。だが現実にはそんな事はない。ホロコーストの中でもユダヤ人を助けた人間は居たし、米ソが核戦争を起こし地球を破滅させると言う事も起きなかつた。

しかし、ここまで的事は無いとは言え、確かにこの種の狂気は人の心中に巣くっている。この本はそういったものを抑える理性の為の警告書であると私は思っている。

## 佳作 『十七歳』を読んで

2年4組 岡 鮎美

私はこの本を読んで、共感することが多々ありました。この本は、17歳の少女が自分の思っていることを、赤裸々に書いていて、だからこそ、同い年である私も共感できることがたくさんあったのだと思います。の中でも、特に心に残っていることが二つあります。

まず、「いじめ」についてです。最近は新聞やテレビなどで「いじめ」による自殺のニュースが多くなっています。この本にもあったように、学校側の言い分は、「気がつかなかった」や「知らなかった」です。実際、本当にそうなのか、自殺に発展するほどのいじめなら、気づかない方がおかしいのではないかと思います。作者は、小学生の時に受けたいじめで、先生に相談したところ、「もう少し様子を見なさい。」と言われたとありました。これには、驚いてしまいました。作者はこの先生の対応に「これだもん、いじめなんて防げるわけはない。」と言っています。私もそうだと思いました。子供は大人以上に、感覚が敏感だと思います。だから、大人が大したことではないと思ったことでも、子供にとってはすごくストレスに感じたりします。先生というのは、こういう子供の感じていることを、分かってあげなければいけない職業だと思うのに、そん

な対応では、「いじめ」は減っていないんだろうなと思いました。

次に親についてです。この本を読んで、作者のお母さんは一言で言うと、「いいお母さん」と思いました。作者のことをよく考えていて、少しの変化にも気づいてくれたりする、親って感じの親だと思います。私の両親もいい親だと思います。でも、最近はあまり親に悩み事を相談するということをしなくなりました。「心配をかけたくないから」というより、心配されるのが嫌だからです。親としては、自分の子供が心配なのだろうが、時には、そっとしておいて欲しい時もあります。作者は「あんがい親って子供の心に気がついていないし、知らないところで子供の心を傷つけてる。」と述べています。この文を読みながら、確かにこういうふうに感じることもあるなと思いながら、その反面、自分も親を無意識に傷つけてるのではないか、と思いました。

私は、この本を読んで、家族のこと、友人のこと、社会のことなどもつといろんなことを考えさせられ、多くのことを得たような感じがします。共感する部分が多かった分、自分を見つめ直すいい機会になったし、考えを共感できるというのは、嬉しいことだな、と思いました。そして、この本を読んで良かったと心から思います。

## 佳作 | 海と毒薬

2年5組 福島和哉

過ちを犯したとき、「社会が悪い」「環境が悪い」と言う犯人や弁護士がいる。「責任能力が無い」という理由で罪を免れようとするやつもいる。日本は法治国家であり、そのような理由で罪が罪でなくなるのが日本の法律である。確かに存在したはずの罪が無限に薄められ、いつのまにか消滅するのである。日本という国は、罪に対する認識が不足しており、犯罪者も法律家も正面から受け止めることを避ける癖があるように私は感じる。今回の課題図書からは、目の前で行われている実験が罪であると確信しつつ、何もできずに立ち尽くすしかなかった男の苦しみを読み取ることができた。当時の日本は今に比べ、社会的な「罪の意識」は格段に軽かったのだろうと思う。法律的に罪でなくとも、自分自身が咎を背負っているという自責の念こそ、今の日本社会に不足しているのだと強く考えさせられた。

物語は戦時中、医者である勝呂が助手として、生体解剖をする様子が書かれている。物語を読むまでは「人の心があれば、こんなことはできない。」と、悪行を見る気持ちであった。しかし、戦時に病院で働くな

んて、正気を保ったままではとてもできることだと思はれた。

『みんな死んでいく時代やぜ。病院で死なん奴は毎晩、空襲で死ぬんや。』と、同僚の医師がつぶやく場面がある。仕事場では近いうちに死ぬ患者であふれ、町にも死体があふれ、明日のわが身もわからない。戦場でも毎日人が死んでいる。人の命の重さが最も軽かった時代のひとつだったのだろう。戦争で千人殺せば英雄だが、この時代の一人の命で、後の世の千人を救うことができたら英雄なのだろうか。

人間は罪の塊のような生き物である。人の生体解剖はしないとしても、毎日生き物を殺して生きている。よく残忍な人を指して血も涙もない、というが、多くの人は血も涙も枯れてしまっているのではないだろうか。

日本人に神はない。どんな罪を犯しても裁くのは人でありその罪は消えることもない。しかし罪の重みを感じない人も確かにいる。この世には悪も正義もないよう思える。だがそんな時代だからこそ自分の信じる行動をし、万人から尊敬されるような正しい行動をしたいと思う。

## 佳作 | 『夏の庭』を読んで

建築学科1年 梶原萌子

「死んだ人が見たい。」そんな好奇心から生まれた三人の小学生の友情。私はこの本で「死」や「生」について考えさせられた。

三人の少年は、もう少しで死にそうな老人を観察しはじめた。観察しているのに気づかれ、水をかけられたり、怒鳴られたりしたが、少年達と老人との関係は深くなっていた。この少年達は、老人との出会いで老人から果物の切り方や草のむしり方等様々なことを吸収し、戦争での話を聞き老人のために行動し、人の為に何かをするという喜びを得た。老人もまた、生きる喜びを再び見つけた。少年達と老人の世代を越えた友情が芽生えていた。

しかし、そんな中で老人は皆で食べようとブドウを盛ったまま死んでしまっていた。本当の死を目前にした少年達には涙が止まらなかった。また、お化けや幽霊や妖怪といったこわがりながらも興味しんしんだつものではなく、胸にぽっかり穴があいたような思いもよらない悲しみがあった。

なぜ、突然死はやって来るのだろう。なぜ、死ぬのが今だったのか。死ぬ直前と直後では息をしていない、心臓が動いていないこと以外はどこが違うのだろう。死という未知のものだからこそ、疑問は増えていく一方で、理解などできないのかもしれない。少年達は老人との関わりの中で成長し、老人の死と向きあうことで老人というかけがえのない友達の大切さに気づいただろう。

大切な人の死、私の目の前に現れるのは突然でそれを考えると恐いものがある。逆に死んだ時にどれだけの人が少年達のように純粋に涙を流してくれるのだろう。老人と少年達のような心からの交流ではなく、上辺だけの心の通っていない交流では涙を流すことはできない。毎日を送っていく中で、人との心の交流をし、対等な友情を育てたいものだ。そして、死ぬ間際まで幸せだった、この世から魂がなくなったとしても、誰かに幸せを与え続けていけるようになりたい。「生」があるならもちろん「死」がある。私たちは一日一日が死に近づいている。その一日一日がかけがえのない輝いたものになるよう一日一日を大事に生きたい。

# 審査員講評

図書館長補佐・一般教育科 松尾 明洋

これまでに感想文コンクールの第一次審査を行うことはありました。最終審査に関ったことは初めてでした。最終審査は第一次審査とは異なり、どれも力作ばかりで甲乙をつけ難いものでした。一言で感想文と言っても、本を読む人が違えばその感じ方も違い、感想文の表現も様々でした。中には短い文章の中で、本の内容と自分自身の考えをしっかりとまとめてあるものもあり、私自身がその本を読んだかのような気持ちになり感心させられました。

またいつか同じ本を読んだとしても、その時の気持ちや周囲の雰囲気などで、全く違う感想を持つこともあるかもしれません。学生時代に読んだ本を、就職、結婚、出産など人生の節目で読んでみるのもいいでしょう。新しい発見があり、これから的人生観が変わったりするかもしれません。その時の気分で、いろんな本を手に取ってみては如何でしょうか。

機械工学科 篠崎 烈

みなさんが書いた読書感想文を読んでみて、「一冊の本を読んで、よく考えているな」と思えるものが数多くありました。特に最近の世相からか、「命」というものをテーマにした作品が多かったように思います。今、目の前にいる人と話をして、いろいろと考えることもいいことですが、「文字」や「文章」から人間の感情や情景を考えることも大切なことです。私は、本を読むことは多くありません。しかし、みなさんの感想文を読んで、読みたいと思う作品があることに気付かせてもらいました。そんな作品を一冊ずつ、時間をかけて読み、新たな考えを見たくなりました。

電気工学科 池之上 正人

本を読む人は少なからずいろいろなことを考え、様々な知識を得ることができます。そのような時間を過ごせることはとても贅沢なことだと思います。さて、昨年度に引き続き、今年度も読書感想文コンクールの審査員をさせていただきました。どの感想文も、感動した場面や自分の心に響いたフレーズなどに対する自分の考え方を感じることをしっかりと自分の言葉で表現できており、すばらしい作品ばかりでした。皆さんの感想文を読んで、私も読んでみたいと思う作品がありましたので、早速読んで贅沢な時間を過ごしてみたいと思います。

電子情報工学科 嘉藤 直子

今回、はじめて読書感想文コンクールの審査員をさせていただきましたが、同じ作品でもさまざまな捉え方があり、みなさんの感性の豊かさに大変驚きました。

また、感想文の中には、対象とする作品を通して、自分が今抱えている問題を見つめ直しているものが多数みられました。本を読んで感想文を書くということは、「自分自身を振り返り、自分の抱えている問題を整理して解決法を導いていく」というプロセスを行う良い機会にもなり得るのですね。次回も期待しています。

物質工学科 永田 和美

読書感想文を読むと、その本を読んだことで感じた読者（学生）の心を覗き見ることができるのがおもしろい。著者の言わんとすることを自分なりに考え同感したり、それは間違っていると独自の理論を展開したり… ちょうど子どもから大人へ成長していく過程にある学生の考えは、大人から見て「まだまだ甘い」と思うこともあれば「目から鱗」なこともあります。私自身もいろいろなことを深く考えさせられました。

本はたくさん読んだ方がいいと言われますが、量よりも読んだ内容に対し自分はどう感じたのかを「考える」ことが重要です。読書感想文を書くということは「考える」いい機会になったと思います。

建築学科 蒼 敏和

昨年同様、どの作品も、図書の内容を適度に分析し、自身の置かれている状況や今までの経験に照らしあわせて、さらに将来どうすべきかなど、生きいきと表現されていました。ところで、過去3年間（2005～2007）の第二次審査通過作品101編の課題図書別分布をみると、「夏の庭」27編、「高瀬舟」10編、「人間失格」6編であり、第一次審査の段階でも「野火」「鼻」「東京タワー」を取り上げた作品が際立っています。「応募が多いから良い」という考え方主流でしょうが、「多様性にやや欠ける」という気がしました。私自身は殆ど小説を読まないので、あまり自信はありませんが、学生の興味をひくような図書が推薦できればと思います。

一般教育科 燐山 廣志

今年多くの学生から寄せられた読書感想文を読ませてもらう機会を得ました。

指定図書50冊という限られた対象作品の中から選び、所感文を作成するという行為が今時の学生諸君には、いかほどのインパクトを持つのか、自分自身の学生時代の体験に鑑みて、いつも審査前には危惧を抱くのですが、今年もそれが杞憂に過ぎなかったことを実感し安堵しました。と、ともに審査する自分自身が、この作品はこのように鑑賞すべきだという固定観念でしか捕らえきれていないことに深く恥じ入るような、斬新な切り口の感想文を読めたことがうれしかったです。そこに有明高専生の瑞々しい感性に触れられたような喜びを感じました。

昨今のネット上に溢れかえる、<他人の言葉>で己れを語る欺瞞にみちた嘆かわしい事態の中で、<自分の言葉>で自分自身を表現する、その精神の「潔さ」の大切さをも語り掛けてくれているように思いました。

# 図書館統計

## 平成19年度利用状況

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	24	24	20	21	18	18	22	21	18	6	23	20	235
入館者数 総数	5,150	6,884	5,011	3,329	1,914	1,551	2,433	3,764	2,014	626	5,846	1,905	40,427
(内夜間)	875	1,566	720	0	0	0	0	0	0	0	931	0	4,092
(内土曜日)	212	193	224	0	0	0	0	0	0	0	269	0	898
1日平均	214.6	286.8	250.6	158.5	106.3	86.2	110.6	179.2	111.9	104.3	254.2	95.3	172.0
貸出冊数 総数	506	663	881	304	127	56	295	307	309	72	513	104	4,137
(内夜間)	103	167	229	0	0	0	0	0	0	0	125	0	624
(内土曜日)	35	49	37	0	0	0	0	0	0	0	14	0	135
1日平均	21.1	27.6	44.1	14.5	7.1	3.1	13.4	14.6	17.2	12.0	22.3	5.2	17.6

## 分類別図書貸出冊数の推移

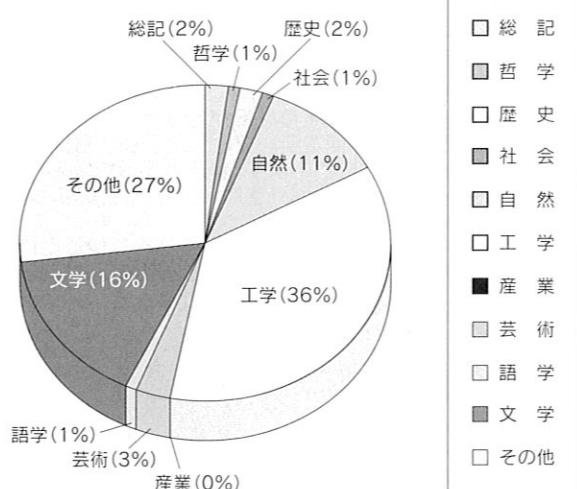
年 度	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学	*その他	合 計
平成15年度	283	70	113	72	907	2,995	34	208	61	924	1,891	7,558
平成16年度	167	109	107	126	815	2,792	30	289	62	1,452	1,896	7,845
平成17年度	148	49	113	93	763	2,618	13	306	9	1,163	1,889	7,164
平成18年度	114	63	173	140	679	2,179	14	151	26	1,206	2,831	7,576
平成19年度	74	63	53	32	568	1,791	5	61	8	689	793	4,137
平均	157	71	112	93	746	2,475	19	203	33	1,087	1,860	6,856

\*「その他」は、文庫・新書および雑誌の貸出冊数を示す。

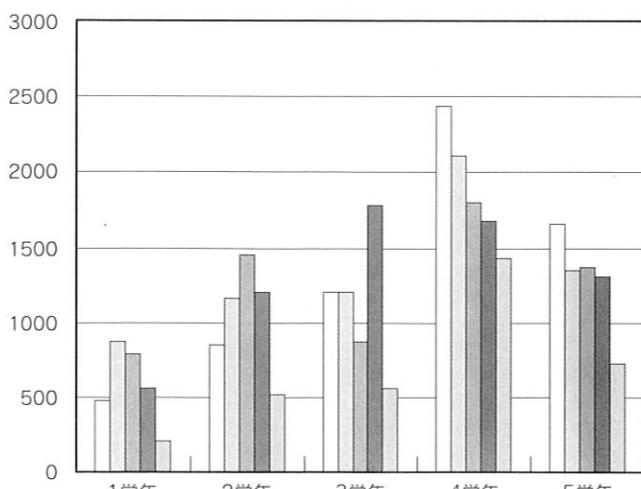
## 利用状況の推移

年 度	開館日数	利用登録状況				入館者数				貸出冊数				1日当たりの数値	1人当たりの数値
		総 数	(内学生)	(内教員)	(内学外利用者)	総 数	(内夜間)	(土曜日)	総 数	(内学生のみの貸出冊数)	(内夜間)	(土曜日)	(内学外利用者)	1日当たり入館者数	1日当たり貸出冊数
平成15年度	277	1,312	1,065	182	62	71,983	16,145	7,558	6,617	2,393	123	259.9	27.0	6.2	5.7
平成16年度	271	1,300	1,054	182	64	70,630	15,914	7,845	7,670	2,346	175	260.6	28.9	7.3	6.0
平成17年度	274	1,355	1,063	182	110	63,160	16,037	7,164	6,587	2,022	202	230.5	26.1	6.2	5.3
平成18年度	271	1,273	1,073	175	25	73,033	14,340	7,576	6,893	1,945	222	269.5	28.0	6.4	6.0
平成19年度	235	1,311	1,099	176	36	40,427	4,990	4,137	3,788	759	126	172.0	17.6	3.4	3.2

## 分類別図書貸出冊数(平成15年～19年平均)



## 学年別図書貸出冊数(学生のみの数字)



## 郷土の文化財

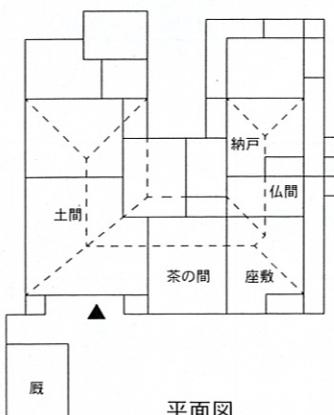
みやま市指定有形文化財 伊藤家住宅  
江戸時代後期  
福岡県みやま市高田町黒崎開御手作

なっています。谷を背面側にとっているので、後谷型のくど造と呼ばれます。

正面の南面の西端に大戸を有した入口があり、大きな土間が奥まで続いています。10畳の茶の間は、2間の開口部で土間に面していますが、真中に柱が立っていることは他ではありません。茶の間東側の座敷には床の間と平書院が設けられ、床脇がないため9畳の広さになっています。長押はなく、大きな差物が入れられています。座敷の北側には4畳の仏間が続き、座敷・仏間の東側には縁側があります。仏間の北側には6畳の納戸があります。

使われている主な木材は、柱が杉、差物が松であり、座敷床の間の框や落掛けには檜が用いられています。玄関の前には別棟で馬屋が設けられています。

伊藤家住宅は江戸時代後期に遡り得る古い農家です。周辺地域にはもう古い農家が無いので地域の民家の内で重要な遺構になっています。また、茅葺を伝えていることでも貴重です。  
(建築学科 松岡高弘)



平面図



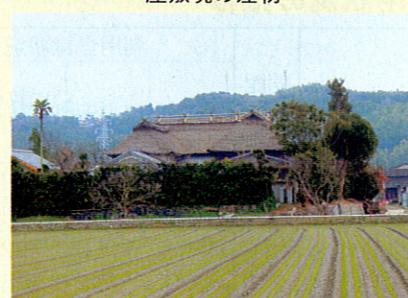
座敷



座敷境の差物



正面



背面

## 編集後記

NHKの番組に「にほんごであそぼ」と「ことばおじさんのナットク日本語塾」があります。「にほんごであそぼ」は、4歳から小学校低学年ぐらいの子どもと親を対象に、日本語の豊かな表現に楽しく遊びながら日本語感覚を身につけることをねらいとされていますが、誰が見ても勉強になると思います。「ことばおじさんのナットク日本語塾」は、日本語の本来の意味や表現、間違いややすい言葉など、日常的に使う言葉をテーマに分かりやすく解説され、本当に「ナットク」する番組です。

言葉は時代とともに変化しています。最近では、言葉を含め、これまで常識だと思われていたような事が雑学として扱われたり、クイズ番組として人気を得ています。皆さんもご存知の国語学者金田一秀穂先生は、日本語をテーマとしたテレビ番組の監修や解説を行ったり、ある時には解答者と出演し、日本語の面白さを視聴者に伝えようとされています。言葉の表現や意味など、同じ語句であっても、その用い方が正反対になっているものすらあります。例えば、あなただったら「全然」の後にはどのような言葉を使いますか。

読書感想文コンクールで、最終審査まで残った作品にも誤字などが見られるものもありました。正しい字を書けないことは、読書量が少なく、さらに自分の手で書こうとしないことが影響していると思われます。最近では、生活の殆どを携帯電話に頼ることが多く、漢字が分からなくてもボタン一つで分かる時代です。何か調べるにしても、ほんの数分で答えが出ます。時間的に余裕がない現代人にとって、インターネットは生活の一部となりつつあります。

携帯電話で調べることを抗生素、書物で地道に調べることを生薬に例えてみましょう。抗生素は即効性はあってもそのリスク(副作用)は大きいです。携帯電話も正しい使い方をすれば、非常に役立ちます。しかし、現代人にとって必要なことは、リラックスした気分での読書でしょう。これは徐々に知識を蓄積していく生薬のようなものではないでしょうか。毎日の生活中に、ゆっくりと読書する時間を欲しいものですね。

様々なことが簡単に調べられ、読書で得られる知識や実体験が以前に比べてかなり減っている現代社会、書店には常識的な雑学本のコーナーもあるほどです。書物にはいろんなジャンルがありますが、しばらくネット社会から離れて図書館や書店などに足を運び、本の表紙を眺めてみましょう。きっとあなたにあった本に出会えることでしょう。さらに、先に述べたテレビ番組などいろいろな言葉を知りたいすると、読書の楽しみ方も変わってくるかも知れませんね。(M)